

社会福祉法人 日野青い鳥福祉会

2022年度 法人本部・事業計画 (案)

はじめに

昨年度、2生活介護体制に踏み出し、事業的に、財務的にも大きな支障はなく動き出した。しかし、コロナ禍で第6波の緊急事態宣言下の運営であり、オミクロン株の急激な拡散に伴いクラスターが出てしまい、2月にあおitori上田、あおitori日野、またGHも閉鎖する事態に陥りました。

また、悲しい出来事が2件、親御さんの一酸化炭素中毒死による事故死、何の準備もないままいきなり厳しい現実を受けとめざるを得ない利用者二人の気持ちを思うと切ないものである。無事故を祈る心づもりで新年度に臨みたい。

加えて、法人理事長が親の会会長を兼ねる事になり、法人としての連携体制をより緊密にし「法人と親の会」的なより親密な協力関係への一步を踏み出す心づもりでいる。

1、第2期中期経営計画との関連から

第2期中期経営計画の3年目であり、この2年の経過を振り返り、詰めの3年目としつつ、第3期計画の糧として立案する年になる

計画を意識して事業を進めること、法人の本来業務である生活支援の原則を地道に展開し計画に応える姿勢で臨むこととする

2、法人・重点目標

2生活介護事業体制の効率的な運用に向けて、部署間の連携、SV体制の活用、事務処理の一元化を着実に展開できるように連携に意を用いる

- (1) 新事業体制2年目、事業の緊密な連携を進める
- (2) プロジェクト体制の下に働きやすい職場・支援土壌を向上させる
- (3) 人材育成に力点を置く
- (4) 適切な労務管理と財務基盤を整える
- (5) 親の会との連携を密にし、親の心情を受けとめる

3、計画内容

(1) 新事業体制2年目、事業の緊密な連携を進める

①主任を交えた部署別実務者会を軸に進め、現場意向を運営に反映させる

- ・担当部署に目が行き届きやすくなり、現場の声の反映と同時に、支援観を整理する機会とする
- ・施設長、主任の法人方針の理解のもとに適切な事業運営に寄与する土壌をつくる

②現実肯定の支援原則を実践できる土壌としてチームワークを作っていく

- ・新たな気づき、新たな解釈、新たな関係を打ち出せるように実践をすすめる
- ・各事業所の実践を承知して参考にする

- ・一方、研修企画担当として、内部研修の充実、外部研修、もしくは外部講師研修の立案をする
- ・予算化された全国大会への職員派遣、実務研修補助なども積極的に活用する雰囲気を作る

(3) 人材育成に力点を置く

- ①「あいうえお」の実践、それを検証するエピソードまとめ、また個別エピソードを読み通す作業を通じて個別テーマを浮き彫りにすることで全体像を把握する
 - ・全体像の把握と場面展開のエッセンスに即して関わることで支援効率の良い関わりを身に着ける
 - ・設立 20 周年（2023 年）「エピソード選集」発刊の具体的な準備に入り、2022 年のエピソードでめぐることを承知して取り組む
- ②内部研修の充実
 - ・生活支援の原則を現実肯定と位置付ける。さらに今“ある”姿を受け止めることが次の姿に“なる”エネルギーとの認識に徹して関わる
- ③SV 体制の強化で OJT の充実を図り、人材育成に寄与する

(4) 適切な労務管理と財務基盤を整える

- ①労務管理の視点
 - ・労務管理の適正化で民主的な運営、また職場規律、職場秩序を整える
 - ・規程類の適宜な改正、運用を図る
 - ・職場づくりプロジェクトを介して進める
- ②財務基盤を整える
 - ・そのため堅実な運営が求められる
 - ・収支バランスを取りながら積立計画、職員待遇のあり方などを見直していく
 - ・法人の将来構想を念頭に経営のあり方を注視する

(5) 親の会との連携を密にし、親の心情を受けとめる

- ①法人・親の会ミーティングにおいて、双方の意見交換により相互に「和して同ぜず」の関係づくりに努める
 - ・代表制ではなく、自由参加形式に切り替え、親の思いを聞くことに力点を置く
 - ・一方で、現場の運営の強みを生かして、福祉界の現状をできるだけ分かりやすく解説することも守備範囲に置く
- ②必要に応じて、個別の時間を設け、じっくり話し合う
 - ・親側の要望に対して真摯に検討し応えていく。また実務側の状況をご理解いただく
 - ・「あいうえお」の実践とエピソードの活用の点から共同歩調を保てるように努める